価値物とパリミサ問題*

江原 慶†

2010 年 10 月 8 日

『資本論』

「二　相対的価値形態」を読んだ。

■「a　相対的価値形態の内実」

価値物と価値表現

リンネルの価値という目に見えないものをどうやって表現するか。

1. 上着を価値物にして、
2. リンネルと等置する

- 蟻酸プロピルの例は、第三のものと現象が切り離されてしまっているので、価値表現の例としては不適。

価値物

「価値の担い手」、価値体、価値鏡など様々な表現や例示がある。
結局、何が価値物になれるのか。

- 労働生産物
- 定量性
- 交換関係（王位と臣民の例。関係の第一義性）
  価値物そのものには価値はいらないのだから、紙券流通を認める立場になる。

■「b　相対的価値形態の量的規定性」

ここを素朴な意味の労働価値説の例示として読むならば、意味のない箇所。

しかし、a で価値表現と価値物の生成を読み取ると、ここは価値量を表現する価値物の量を論じようとしている箇所だということになる。じじつリンネルの量は固定されている。

- 「半着の上着」というのは、使用価値的には意味がないが、価値物としてはどうか。

---

* 2010 年度小幡ゼミ夏期休暇まとめ

† 東京大学大学院経済学研究科修士課程　kei.ehara@gmail.com

日高 [1994]「パリはミサに値するか」

■日高説のまとめ

- S.67 の「パリはミサに値するか」という引用は、アンリ 4 世はパリを目的物、ミサを提供物としているのだから、『資本論』の中で唯一相対的価値形態の商品（提供物）で等価形態の商品（目的物）の価値を表す形になっていて、他の箇所と逆になっている。
- 宇野は、商品所有者の欲求にしたがって等価物の商品の量がまず決定されるという見方を打ち出した。そのため「パリはミサに値する」の形式をはからずも引き継いでいることになる。
- 等価物の商品の量をまず決定し、それにあわせて相対的価値形態の商品の量を加減するという商品所有者の行為が価値形態でやっていることなら、等価形態の商品の価値を相対的価値形態の商品の量で「表現」していることになる。

■日高批判

日高は、等価形態の商品量を固定し、相対的価値形態の商品量を動かすことを「価値表現」と呼んでいるが、これは目に見える現象の世界で物量と物量を比較しているだけ、いわば測量にすぎない。

そのため、目に見えない何かを現象の世界に引き出す、表現という行為を捉えたことにならない。

参考文献

♦ Marx, Karl [1867] *Das Kapital : Kritik der politischen Ökonomie*, Buch I, in *Marx-Engels Werke*, Band 23, Dietz Verlag, 1962.

♦ 日高普 [1994]「パリはミサに値するか」同著『マルクスの夢の行方』青土社.